

新型コロナ5類に移行…高齢者はワクチンを打って、普段通りの生活を（上昌広）

2022年1月31日 日刊ゲンダイ

【どうする、どうなる「日本の医」】#44

コロナ感染による死者数が急増している。昨年10月には全国での死者数は1864人だったが、11月には2985人、12月には7622人とうなぎ上りだ。

年齢	陽性者数	死亡者数	致死率	陽性になった ら死ぬ割合	40代前半 との比較
90歳以上	408人	23人	5.64	18人に1人	130倍
80～89歳	1364人	63人	4.62	22人に1人	107倍
70～79歳	2491人	41人	1.65	61人に1人	38倍
65～69歳	1690人	18人	1.07	94人に1人	24倍
65歳未満	13万5350人	64人	0.047	2115人に1人	

※新型コロナウイルス感染症対策アドバイザーリーボード資料から。2021年7月現在。致死率の単位は%

この時期に政府は感染症法でのコロナの位置付けを2類相当から5類に変更すると発表したのだから、マスコミは大反対だ。

朝日新聞は1月20日の「天声人語」で「いま緩和に動いて本当に大丈夫なのか。第8波は続き、高齢者を中心に死者数も過去最多レベルだ。誰かに犠牲を強いることにならないか」と記している。私は、このような論調に賛同できない。今こそ、高齢者はワクチンを打って、普段通りの生活を送ることを勧めたい。感染症を恐れて、自粛を続けることは高齢者のためにならないからだ。

医療ガバナンス研究所の山下えりか医師は、厚労省の「人口動態統計」を用いて、2019年と2021年の死因の変化を調べた。

驚くべきことに、19年と比べて、21年に人口10万人あたりの死亡数が最も増えたのは老衰（25人増、25%増）だった。次いで、コロナ（14人増）、誤嚥性肺炎（7人増、23%増）、心疾患（6人増、3.4%増）、悪性新生物（4人増、1.3%増）、アルツハイマー病（2人増、10.8%増）と続いていた。逆に肺炎（18人減、23%減）、脳血管疾患（2人減、1.8%減）、不慮の事故（1人減、2.1%減）は減っていた。

厚労省やマスコミは、コロナによる医療逼迫が死者増に影響しているというが、どうやら、それは的外れようだ。もし、そうなら心筋梗塞や脳卒中などの急性疾患での死者が増えているが、心疾患は微増、脳血管疾患に至っては減っている。

■老衰、誤嚥性肺炎、アルツハイマー病の死者が増加

老衰、誤嚥性肺炎、アルツハイマー病による死者数の増加は、コロナの2.4倍だ。このような疾患は、老化による身体や認知機能の低下が原因だ。自粛による運動不足や、社会的な孤立が影響したと考えるのが自然だ。

これは隔離一辺倒の感染症対策が、国民に過剰な恐怖心を植え付け、国民を過剰に自粛させたためだ。ところが、専門家は、このような事実には言及しない。そして、いまだに国民を脅し続ける。西浦博・京都大学教授は、「社会全体で緩和に伴う自由を手に入れるこ

とは、ヨーロッパの規模の感染や死亡を受け入れることにも通じるものです(12月31日、バズフィード)」と語る始末だ。

私は、コロナから我が身を守るために、ワクチンを打って、日常生活に戻ることをお勧めしたい。オミクロン株以降、世界の感染の中心は日本や韓国などの東アジアだ。完全に感染を避けることはできない。幸い、オミクロン株は弱毒だ。ワクチンを打ち、体力が維持されていれば、高齢者が感染しても問題なく治癒する。実は、これこそが世界のコロナ対策の標準だ。そろそろまともな対応を取らねばならない。

(上昌広／医療ガバナンス研究所 理事長)